

# トラワレリンネの覚書

---

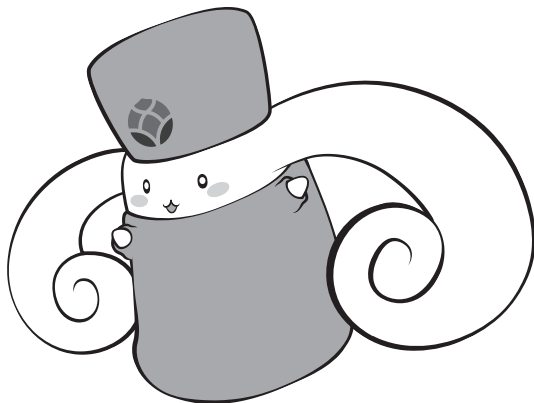
富嶋 克樹



おぼえがき

# トラワレリンネの覚書

プロローグ



私は彼に一目惚れした。  
でも、彼は親友の婚約者だった。

こんなに好きなのに……。

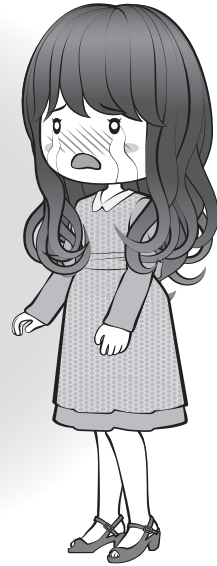
なんで、もう少し早く、

出会えなかったの？

こんな出会い方は苦しすぎる！

彼は「運命の人」に違いない。

前世ではきっと私と結婚していたに違いない！



そんな私の所に、突然変な占い師が現れて、私の前世を教えてくださいました。

彼は確かに『運命の人』ですよ！  
でもね、

前世でも彼とは、結婚できませんでした。

その前の前世では、死ぬまで片思いでした。

その前の前の前世では、敵同士で、

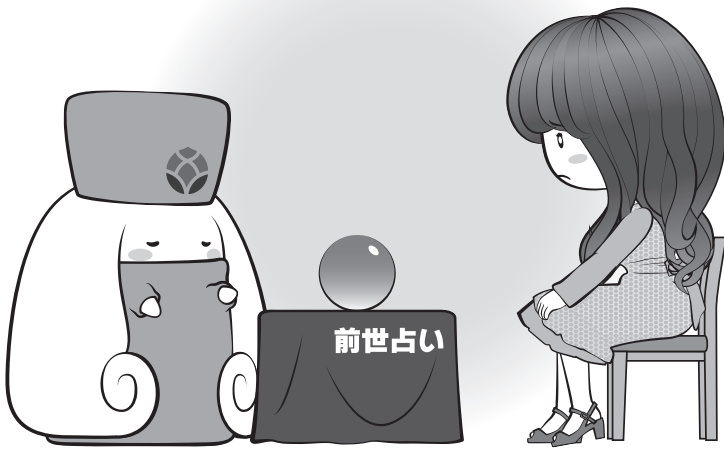
結ばれませんでした。

毎生、彼のことで苦しんでいました。

ウソ！ 運命の人なのに、なんで？

だって彼は『苦しい運命の人』なのですよ。

これが私の「トラワレリンネ」でした。



私は昔、某商業誌で漫画家をやっていた。

でも別に漫画好きというわけではなかった。私の中に吐き出したいものがあり、それを何らかの形で表現したかっただけなのだ。本当は音楽でも小説でも何でもよかった。ただ絵が得意だったから漫画家を目指した。でもたいして売れず数年で辞めた。

何かを吐き出したいという思いに自分で気がついたのは漫画家を辞めたあとのこと。

何気なくカウンセラーの学校に通い始めて、心理学に触れるようになってからだ。

ある時、心理療法の中に、退行催眠や前世療法と呼ばれる手法があることを知った。

「前世」とは、生まれてくる前、別の人格として送っていた人生を指す。

いったい前世療法とはどんなものなのか。試しに興味本位で実際に受けてみた。

終戦直後、広島の被爆地をひたすら歩きながら、お経をあげているお坊さんの姿が出てきた。無数の死体の中を無表情でひたすら歩いていた。見るに堪えない光景だった。

この場面が見えた時、「これは前世の話だ。今は、もう泣いてもいいんだ」という認識が生じたたん、涙がポロポロとあふれた。自分が幼い頃から感じていた得体の知れない悲し

みと怒りの正体はこれだったのかと、心のとても深い部分で納得感が生じた。

この前世が本当の前世かどうかはよくわからない。ただ、私の心の底にあった悲しみと怒りが、頭で理解できる形で吐き出されてスッキリしたのだから、もうそれでよかった。

以来、仕事の傍ら、前世療法を人に施す事業をやり始めた。数百人ほどこなしていくうちに、お客さんの特定の悩みに対して特定の前世のパターンが現れることに気づいた。輪廻において苦しみの生じる法則性のようなものだ。これに非常に興味を持った。

私は、悩みや苦しみを「嫌悪」「孤独」「不安」の三つに分け、先ほどの輪廻の法則性に当てはめ、独自の消化法として体系化した。それがサロン「これんね」で行っている「心応理学講座」だ。本書はその入門書ともいえるべき立ち位置になる。

すべての苦しみは「囚われ」から生じる。この囚われ続ける心の状態を、本書では「トラウレリンネ」と呼ぶ。そしてこのトラウレリンネを手放し、心を軽くして、運命に変化をもたらししていくことが本書のテーマになっている。